ヘーゲルの「一者」範疇－充足した単独者の空虚と没個性化－

近藤良樹

１．はじめに

ヘーゲル『大論理学』は、その有論の質範疇の展開の結びに、「一者 das Eins」をもってくる。質論の次は量論になるので、それへのスムースな移行のために「一者」を（さらにこれとのペアで「数多」を）いっているのみのことであろうと思われがちである。一も数多も量の概念になり、そうであれば、質論にとっては、それらは場違いだということになる。ヘーゲルは、範疇を自己展開するものと捉えて、しばしば無理なかたちで次へと移行を論じ、移行規定では奇弁を弄することが多いので、量への移行でも、質にはふさわしくない「一者」という量的な範疇を出してきて、移行を準備しているのだろうと推量されてもしかたのないようなところがある。

だが、この「一者」に関しては、移行のために無理に質論の最後にこれを付け加えたのではなく、質論を完成させるために、はじめから予定されていたもののように思われる。質論（有論）は、有・存在を論じ、真に具体的に存在するものは、つまりその展開の結びは、「一者」になるというのだが、ヘーゲルのこの「存在」論は、アリストテレスの立場と同じで、真に存在するものは、（第一の）実体は、普遍的なイデアではなく、個物だ、個別的な個々の存在者だというわけである。個別者(Einzelnes)といわないのは、個別が普遍(本質 ・全体）との連関のもとにあって、有論の抽象的で直接的な段階には、なおあげにくいということがあったからだろうが、ヘーゲルの「一者」のもとで思い描いてよいものは、個物・個別者である。個別的なものの有論レベルのすがたが「一者」になるのである。「個別」は、論理学では概念論にあげられているが、そこではヘーゲルは、個別とならべて有論での「一者」をあげ、個別は、有論にひきもどすと「一者」になるというのである（Vgl.G.W.F.Hegel Gesammelte Werke. hrsg.von der Rheinisch-Westfaelischen Akademie der Wissenschaften. Bd.XII. S.51　以下の引用には、この全集の巻数と頁数のみを付す ）。

また、『大論理学』に先立つ『精神現象学』でも、「一者」は、個物からなるこの世界の基本的な範疇として登場させられている。『精神現象学』は意識の展開を感覚的なところからはじめていくが、その冒頭の感覚的意識におけるその対象は、感覚的個別としての「このもの Dieses」と規定される(IX.63f.)。そのつぎは、知覚的意識になるが、それがとらえる対象は、感覚的なものをこえて普遍化した「物 Ding」(IX,71)になるとヘーゲルはいい、そこで、物を 、「一者 das Eins」(IX,75)として存在すると捉えるのである。ひとつの物、 たとえば、太陽は、赤い色、あたたかさ、まるい形等の連結した「もまた Auch」(IX,72)からなり、しかも、それらは、まとめあげられて「一者」となって いるというのである(Vgl.IX,73)。

ヨーロッパ中世哲学では、「普遍論争」がその歴史の赤い糸であった。普遍は、この世界の特殊的な個々の実在物、つまり個別にとっての普遍であろうから、常にそのもとでは

個別的なものが、したがって「一者」が想起されていたといってよい。一者は、また、唯一神の唯一者でもあった。そういう歴史とヘーゲル自身の個別・個物の理解をふまえての一者が、『大論理学』有論の「一者」である。とすれば、かれが、有ー定有ー向自有と展開する有論（質論）の有終の美をかざるものとして、「一者」をあげているのは、量論への移行のために無理をしてのことではなく、妥当な配置になっているのだといってよい。しかも、一者は、必然的に量化をさそうので、量論への移行にもかなっていたということである。

２．向自存在者としての一者

さて、ヘーゲルは、「一者」を「向自有」から導出する。向自有(Fuersichsein)が向自存在者(Fuersichseiendes)になると、これが一者だと。向自有のような有＝存在(Sein)から、その存在者(Seiendes)への展開は、ヘーゲル独特の展開である。それは、概念・イデアからこの実在世界の個物への展開である（この点は、プラトンのイデア論に類似する)。かれは、「定有 Dasein」から、「定有するもの Daseiendes」（＝「或るもの Etwas」）への展開を論じるところでは、「定有」としての「生命」「思考」などの単なる「普遍性」(XXI,103)にとどまるのではなく、定有するものとしての「生命あるもの」、「思考するもの」にまで展開しなくてはならないといい、定有するものを「実在的なもの Reelles」(XXI,103)と特徴づけている。向自有についても同様で、これは、単なる普遍的な、イデア的なものにとどまるから、さらに、個別的で実在的な現実的なものにまで、つまり向自存在者にまで具体化しなくてはならないということになるのである。

実在論の立場からいえば､まず存在するものとしての具体的な思考存在者や生命体があって、それから抽象して、それらの本質的な規定・機能などが、つまりそれらの概念・観念・イデアが可能になる。生命体があって、そのあとに生命という抽象的概念がなりたつのである。しかし、ヘーゲル観念論は、逆に、現実的な具体物をあげるに先立ち、それの普遍的な概念･イデアをいい､それが個物的な具体物へと自己展開すると見なすのである。

この自己展開をいうために、ヘーゲルは、普遍的なもののうちに具体化し実在化する規定を見い出していこうとする。「定有」のところでは、これが実在性と否定の二規定をうちに止揚して、区別をなくし自己内に反省して単純なものに、「自己内有 Insichsein」になるから、「定有するもの」になるのだと進めている(Vgl.XXI,103)。他からの規定・媒介をなくして「単純な自己関係」(XXI,103)になって、自己自身で存立する直接的なもの・実在的なものになるというわけである。向自有から向自存在者への展開では、ヘーゲルは、向自有は自己が自己に向かっているのだから無区別的になって、無媒介の「直接性 Unmittelbarkeit」になるから、つまり、媒介的観念的なものではなく直接的なもの・実在的なものになるから、「向自存在者」に、「一者」になるのだと進めている(Vgl.XXI,150f.)。

では、向自有を向自存在者（一者）にと展開して、範疇論としての意味があるのであろうか。機能や本性的規定を、さらにそういう機能・本性をもった「もの」だと事物化・具

「体」化して意味があるのだろうか。「所有」概念を「所有するもの」「所有者」にと具「体化」して意味があるとすると、「者」となることで、それのもつ規定・限界が加わって、所有概念にあらたな関連概念が見い出されてくることはありそうである。「者」つまり人は、死ぬし、数多存在するから、「相続」とか所有権の「譲渡」などが所有のもとであらたに論じられるということである。

向自有のばあい、それを向自存在者＝一者とすることで、ではなにかあらたに向自有範疇に規定が加わるのであろうか。向自有(Fuersichsein)は、それだけで独立した(fuer sich)存在で、他者にかかわることをやめ、他者を克服・ 止揚して、自己に帰り、自己充足した存在であるが、それが実在的世界における向自的存在者としての一者になる場合、向自有の止揚した他者は、イデールには止揚されていても、実在的には、実はそのままに残っているので、一者のそとにあって、他者（これも外の一者となる）として自立的な一者に干渉してくることになる。とすれば、向自有＝一者は、自己原因的に自己のみに安らいでいるというわけにはいかなくなり、自身を自立した存在者として維持するために、そとからの干渉を排除していかざるをえなくなる。つまり、向自有とちがって、実在的世界に具体化している一者としては、他の一者を前提しなくてはならず、これに対しての排斥的活動が不可欠になるのであり、さらに、唯一ではなく、そとに他の一者があることになるから、「数多」概念や、それらの間の同一性等も問題になってくるといわれねばならないのである。

３．排斥的な個体としての一者

ところで、われわれは、この世界にあるものを、「一つ」「一」と個別的にとらえるが、一つのものの成立は、例えば、一つの窓は、どのようにして可能となるのであろうか。かべに一つのガラス窓があるのは､広がりをもったかべのもとで､かべを切り取り区切って、周囲から独立したひとまとまりをなすことによってであろう。この区別をつけられないものから見ると、それは、かべとは別の一つのものとはならない。閉じられた窓は、こうもりや風にとっては、無窓で、無区別のかべが存在するのみとなろう。

「一者」をヘーゲルは、「排斥的統一 ausschliessende Einheit」と『精神現象学』には特徴づけるが(IX,73)､ものごとがひとまとまりのものとして独立しているのが一者であろうから、他を排斥し、周囲から区別してということがひとまとまりの一者の存立の根本にあるのは確かである。『現象学』は、「物」を論じるところで、「一者」を「もまた Auch」とペアにしてあげ、例として「塩」をもって論じている。塩は、その性質として「からさ」も「白さ」も「重さ」ももっており、それらの性質の「多くの単純な連合」として「もまた」と特徴づけられ、かつ、それらの諸性質は、横ならびに並列的になっているのではなく、塩としての「一者」のもとに統一されているのだと捉えている（IX,72)。そのばあい「一者」としては、塩は、甘さという性質は排除しているのであり、「もまた」と単純に連合していくのではなく、特定の性質のみに限定して他の「対立した諸性質の排斥

Ausschliessen」をするのだとし、「もま た」を、なんでも連合していく「無関心的統一 gleichgueltige Einheit」とし、「一者」を、「排斥的統一 ausschliessende Einheit」と特徴づけている(IX,73)。一者の排斥的活動は、自己のものではない諸性質を排除しているのだが、同時にそのことで、ものの独自性を成立させ、他のものとそれ自身を区別するのであり、排除は、性質のみではなく、さらには「他のものと対立する」(IX,76)という他の物の排除活動となるのでもある。

一者のペアになる「もまた」は、論理学では、本質論の「物」のところにあげられているが、そこでは、「もまた」のペアになるものとしては一者的個物的な規定「このもの Dieses」(XI,338)があげられる。「もまた」は、空間的ひろがりとしてあり、「このもの」は、ものの「点性 Punktualitaet」(XI,338) になるのだと。塩のからさや白さは、単に「もまた」と並列して空間的にならんでいるのではなく、「同一の点」(XI,338)にあり、そこに「このもの」としての塩があるのだということである。「このもの」は、諸性質の集約された統一的一点であり、「点」として、もはや分割できないアトム的な「一者」になっているのである。

「一者」は、他のものと区別し自身ひとまとまりをつくり、「同一の点」にと、まとめ統一するものであろう。一者は、肯定的にはまとめ統一するものになろう。無定形の水は、一つ、一者とは見なしにくい。それがひとまとまりの水溜まり、水滴となって一つのものとなる。しかし、そのためには、他のものを排斥し否定していなくてはならず、その点からは、「排斥」「排除」するものとなる。一者(Eins)は、まとめ統一(Einheit)するものであることは、当然 、ヘーゲルでも前提になっているはずで、『現象学』にいう「排斥的統一」では、「統一」であることが大前提であり、そのうえで「排斥的」と形容されているのである。

しかし、一者が、「もまた」の単純な「無関心的統一」と対比されて、「排斥的統一」だといわれる場合、排斥性が主要な規定と見られているのである。 一者とは、「排斥的一者 ausschliessendes Eins」(IX,74)にほかならないと 。周囲から、他のものからそれ自身を区別し切り離してはじめて、まとまり統一することも可能になる。かべのなかの窓のようなものは、たしかに、なんといっても、かべを排斥し否定していくのでなくては、おしつぶされて存在しえなくなってしまう。しかし、水滴のようなもののばあいは、排斥よりは、牽引、統一が中心となろう。水という物は同じでも、無定形のものは、一つ、一者とは見なされにくいのに対して、ひとまとまりの水滴は、一滴となって、「一」と見なされる。この場合、一者となるかどうかは、まとまり・統一があるか否かということになろう。ただし、成立した一者のありかた、つまり、そとの一者とのかかわりということになると、やはり「排斥的」な規定が主要なものとなる。『大論理学』の「一者」のところでは、「排斥 Ausschliessen」や「 反発 Repulsion」を見出しにするが、この場合は、他の一者の排除ということ が中心になっている(Vgl.XXI,158ff.)。独立し一つのものに、一人前になろうというときには、これを阻害したり飲み込もうとするものを排斥して、一者としての存立

を確保しなくてはならないのである。

４．独立存在としての唯一者

「一者」は、周囲のものからの切り離しによって、ひとまとまりを形成するものとして、独立存在になる。独りして立つものが一者である。他との関わりを捨てて、ひとりになるのである。ヘーゲル論理学は、向自有から、向自存在者としての一者を導出した。一者の本質は、向自有にあるということである。向自有は、自己が自己に向きあって有る完結した存在である。その運動は、そとの他者を止揚し、これを自己のモメントとして取り込み、そとのものにはかかわりなく、自己が自己を定立し根拠づけて自己原因的に充足するものであった。一者は、向自有としては、自立し自己充足した十全な存在に、そのかぎりで充実した独立存在になるのだということができる。

向自有は、そのモメントとして、自身つまり「向自有 Fuersichsein」（または「即自有 Ansichsein」）と「向一有 Fuer-eines-Sein, Sein-fuer-eines」を有するとヘーゲルはいう(XI,87f., XXI,146f.)。自分が自分に向きあっている向自有は、自己に即して有る。かつ、このふたつの向きあった自己は、一つなのである。鏡に映った自分は、虚像でありイデールにのみ分けられているのであって、それは、実在的、本質的には一つである。向自有は、同一のものに向きあっている有、「向一有」なのである。向自有は、本来的に向一有なのであり、この「一」「同一」が前面に出るところに「一者」があるわけである。独りになるばあい、依存している他者から切り離されるのみであれば、それは、自立的な独立存在とはいえないが、自己が自己に向かい他者を不要として自己原因的に充足した向自有では、自立・独立が実現している。しかも、ふたつの自己があってささえあうというのではなく、一つの同一の自己に向かいあう有としての向一有の形式をとるものとしての向自有は、端的に一者となって、真に独り立つものとなるのである。

積極的に独り立ちする意識的人間的な独立存在が向自存在者としての一者の典型であろうが、全体なり周囲から分離して一つのまとまりをなしているようなものは、たとえば、石のひとかけらでも、そとに求めるものがなく、それ自体で存立を保っているのであれば、一、一者と見なされてよいであろう。ヘーゲルは、一者の例としてアトムをあげている(Vgl.XXI,153)。有機的な全体の 部分のばあいは、その部分のみでの生きた存立は不可能だから、それは、独立した一つのものとはならないが、無機的なもののかけらは、それだけで過不足なく永遠の存立を可能とするのであれば、一者となりうるであろう。

向自有としての一者は、自己に自己が向きあったものであり、そのかぎりでは、そとに向くものではなく、比較される他者がなく、一者は、「唯一者」となる。一者は、「絶対的に規定された有 absolutes Bestimmtsein」（XXI,152）だとヘーゲルはいう。相対的にそととのかかわりで規定されるものではなく、対を絶って自己のみにおいて規定されて存立するものだというのである。比較されるものがなく、絶対的なものとなる。一者は、この点において、さしあたり、「唯我独尊」となり、絶対者となる。「お山の大将」「王さま」であ

る。

向自有としての一者にとっては、自己は世界全体であり、一者は、かけがえのない唯一の存在になる。唯一であるから、端的に個性的存在となっているのでもある。ひとが、実存としてかけがえのない唯一の存在者としての一者・単独者であることはいうまでもないが、なんの変哲もない小石であっても、見る　ものが十把一絡げにしているのみで、ひとつひとつは異なっていて、それは、他にかえることのできない存在であり、唯一のものとしての一者になっていると言ってよいのではなかろうか。

さらに、一者は、「自己同等性 Sichselbstgleichheit」(IX,76)を保ち、「 不変 unveraenderlich」(XXI,152) だともヘーゲルではいわれている。一者、一つのものは、別のものに変化してもよいはずだが、同一に不変にとどまるというのである。Eins (一者)は、「一」であるが、「同じ」という意味でもある。このことも手伝ってであろうか、一者とは、同じもの、同一ということになり、同一ならば、変わらないものだということになっている。ヘーゲルのばあい、一者は、自己原因的に充足した向自有を本性にしているから、その点から、原理的に一者は、自己を再生産して永遠に自己同一を維持する。また、一者は、(のちほど「６．数多の一者」で見るが) 一者のみを、同じものを再生産するので、別のもの「他のもの Anderes」にならないから「変化 Ver-aenderung＝ (他になること)」しないということになるのである。

しかし、一者が、より具体的になった、論理学本質論の「物」における「このもの」個物とか、概念論での「個別」は、変化を排除しない。個物は、諸性質・諸材料からなるが、この組成がちがってくるとその個物の変わることをヘーゲルは問題にしている(Vgl.XI,336)。個別者は、普遍的なもの、全体のなかでこれとの関わりのなかで変わり発展するものであろう。「一者」という段階では、それらの変化をまだ見ない、捨象するということである。その点からいうと、一者は、変化しないのではなく、変化を見ないというにとどまる。

ただし、ものによっては、具体的現実のもとで、一者として永遠不変というものもある。古代のアトム論のアトムは、そういう不変の存在であった。われわれ個人の自己意識は、うまれてから死ぬまで同一性を維持するものと見なされている。あるいは、人格としての一者は、一般的には不変・同一と捉えられる。一月前に借金した人が、「あのときのおれは、いまのおれとはちがう。もう変わったのだ」と返済を拒むことは、ふつうの人には許されない。

５．一者の空虚さ

一者は、向自有として、自己充足した絶対的な存在である。しかし、その絶対性は、消極的には、関係するものをもたない孤独な状態をさすのでもある。個別的一者は、実は、それをつつむ全体なり普遍的なもののもとにあり、本質論では、個物としての「このもの」といわれたり、概念論では、普遍に対しての「個別」として現われる。これに対して有論

の「一者」は、全体とか普遍とのかかわりを捨象した抽象的な存在にとどまるのである。

その抽象は、一方では、現実の具体的な個別的一者から、それにかかわる全体とか普遍を捨象して、単純化して見ようということであれば、認識上の抽象である。まずは、複雑なからみあいにある具体的個別を、からみあいから分離し、それのみをとりだして単純明快な一者において見るということである。

本質論における個物の「このもの」は、内的に諸性質・素材の組合せからなることをあきらかにするが、一者の場合は、そういう内的な組成・規定を捨象して「内的意味が消滅している」(XXI,151)ものとして立てられているのである。あるいは、個別者は、普遍的なもの・全体のなかでのそれとして見られるが、一者では、そういう包括するものも構成するものも一切を無視するのである。白紙のうえに単純なひとつの円や点を描いた状態である。円や点（＝一者）のうちがわは、何もなく、真っ白（あるいは真っ黒）である。そのそとがわも何もなく真っ白である。

他方では、一者的抽象は、認識上の捨象ではなく、社会的な孤立のような現実的捨象のばあいもあろう。全体のなかに有機的に組み込まれている一者だが、一者は、これから自己を切り離し、全体を無視できる。あるいは、各独立した一者同士は、無関係になり距離をもったものともなる。さらに、一者は、全体から疎外され孤立させられるというようなこともある。近代市民社会は、各人を一者として自立させたが、それは、否定的には、孤立させることでもあった。失業では、もう不要だ出ていってくれと突き放され孤立を強制され、ひとりぼっちの「一者」にされるのである。

一者は、向自有として自己自身に向きあって自己充足したものであり、そとにかかわりをもつ必要がなく、内面化し自己内にとどまった「最高の内自有 hoechstes Insichsein」(XXI,154)である。だが、それゆえに、他とのかかわりということでは、一者自身は、まったくこれに関知しないものになる。つまり、そとのものから見ると、一者は何一つ手がかりを見せてくれず、外面的に「有る」とのみいえるものになって、「最高の内自有」は、逆に「完全な外面性 voellige Aeusserlichkeit」(XXI,154)になるとヘーゲル弁証法はいう。

ひたすらに内面化した閉鎖国家は、外国への関係・手がかりを排除する。この鎖国状態では、その国のうちは分からず、まったく外面的なかたちで、その存在のみが見い出されるにとどまる。ヘーゲルは、一者の例としてアトムをあげるが、これは、それ自体において充実した端的な有であるけれども、「点」的存在であり、その中身・内容は一切知られないものであって、内部への関与をゆるさない排斥的一者として、まったくの外面的な存在である。

さらに、ヘーゲル弁証法は、自己充実した一者・向自有は、実は空虚なのだとも論じていく。アトムや一者は、充実した有そのものである。しかし、充実とはいうが、自己自身において無区別的でその内的な区別・規定は一切なく、「全差異性と多様性が消滅させられ」(XXI,152) たものとして、端的に無規定であり、いうならば単なる「点」(XI,338)にとどまって、空虚となる。「空虚は、一者の質をなす」(XXI,152)、「一者は空虚だ」という

ことになるのである（XXI,153)。

アトムは、充実した有だが、内的にはなにも規定的なものはなく、その限りでは空虚である。さらにアトムのそとは、真空・空虚な空間になっていた。ヘーゲルは、一者そのものの内的空虚から展開して、一者は、それのそとに空虚を持つと進めていく。「空虚としての無は、存在するものとは異なって、存在する一者のそとに、あるのだ」(XXI,153)と。空虚＝無は、存在とは別ものだから、一者という存在とは別に、それのそとになくてはならないとヘーゲルはいうわけである。しかし、一者のうちの空虚は、内的な意味・規定の欠如をいい、この空虚は、一者という存在のうちにあり、そとになくてはならないとはいえないであろうから、ヘーゲルの叙述そのものは、問題があるというべきだが、一者のそとが空虚であるという指摘そのものは、一者の本質的な規定として大切なものであろう。

一者は、個物、個別的なものの有論レベルでの規定であり、それは、内外の諸規定、つまり、一者を可能としている諸性質・素材、それをささえ、つつみこんでいる全体・普遍をすべて捨象して成り立っているのである。それらが本当はあるのに、捨象しているのであれば、そこには欠けるものがある、空虚にとどまっているということになる。一者は、そういう、あるはずの諸規定を無視したり排除しているのであり、そのことにおいて、一者自身の内面も外も空虚となるのである。他方では、客観的に抽象され疎外され孤立したものとしても、一者は空虚となる。ひとは、本性的に社会的存在であり、一者の独立性は、相対的なものに留まっているのだが、一者化が極端になって社会的孤立状態になり、これと絶縁されるとしたら、無力で空虚な存在になってしまう。あるいは、孤島に一人おかれるならば、かれは、夫でも親でも兄でもなく、教師でもなく、その外的な諸関係において空虚であり、またそれにかかわる内面の精神において空虚な存在になることであろう。

６．数多の一者

ヘーゲル論理学は、「一者」を質論の最高範疇とするのみならず、そこで同時に「数多 Vieles」(XXI,151)を取り上げる。つぎの量論への移行をスムース にするために、数多を恣意的にあげているのであろうと思われなくもないが、「一者」がいわれるとしたら、当然に多くの一者としての「数多」も登場することになる。恣意的ではなく、一者は、必然的に数多へ、したがってまた、量論へとむかうものになるのである。

『精神現象学』で「一者」をいうのは、知覚の把握する物の世界において、「排斥的統一」(IX,73)をもって、ひとまとまりの物・個物をつくるところにおいてである。物は諸属性・諸素材からなるが、それらの組合せの多様さによって、個物は、そのすがたを変えることになり、多彩な諸個物の数多の世界をつくる。あるいは、一者は、全体のもとでの具体的なそれとしては、論理学では概念論の「個別者」になるが、個別的なものは、普遍的なものに包摂され数多存在する。普遍としての「人間」は、具体的な個別者としては、ソクラテスやデモクリトスという諸個人として、多人数となる。一者は、そういう個物・個別の抽象的な有論レベルの範疇として成立しているのであるから、一者は、もともとから、

たくさんあるのであり、「数多」としてあるのである。

一者は向自有から導出されるが、この向自有の成立は、「或るもの」がそれのそとにある「他のもの」を克服・止揚し、自己のモメントとして、イデールにとりこむことで可能となった。向自有として一者は、自己充足する絶対的なものなのだが、実は、そとにはかかわりをもたなくてもよいとはいえ、向自有のそとに、実在的には、「他のもの」がそのままに残っているのである。この「他のもの」は、それ自体においては、「或るもの」であって、これもまた、自己充足する向自有となって、一者として成立しているはずなのである。ということであれば、論理学の向自有のもとに成立する一者は、それ自体としては、「唯一者」として、他のもの＝他者にはかかわりをもつことなく存立しているのではあるが、これのそとには、これと無関係に、別のもの、他者が同様に「唯一者」として存在しているのである。

一者は、もともとから別のそとの一者とならんでいるものであろうが、ヘーゲルは、内在的に展開しようと試み、一者そのものが、自身からもう一つの一者を産出して、それによって数多の一者を存立させていくのだと、つぎのように論じている。一者は、向自的、向一的なものとして、自己が自己に、同一のものが同一のものに、つまり一者が一者に向かいあうということになっているが、「向自的な存在者」であるから、その向かいあうものは、「一つの存在者」となり、一者が関係しているものは、「一つの定有として、一つの他者として」(XXI,155)存立することになって、自分のそとに他の一者を存立させるのだと、一者からの他の一者の生成をいう（一つの「存在者」「他者」になるといっても、自己内の他者的モメントであって、それは、外の他者ではないから、ここには、他者的モメントから、外の「他者」へのすり替えがあるというべきであろう)。

さらに、この生成は、生成ではないとも言われる(Vgl.XXI,155f.)。生成(Werden)は、ヘーゲル論理学では、元来、無から有への（無いものが有ることになる生起)、または逆への移行であり、一者は、もうひとつの一者を産出するだけだから、有と無の関係ではなく、生成ではないというのである（しかし、もとの一つの一者から、無かった別の一者を産出するのだから、その点では、無から有への生成だといってもよいはずである)。さらに、「一者は、単に自己自身から自身をつきはなす」だけだから、生成するのではなく、「すでにある es ist schon」(XXI,156) のだともいう。これは、細胞分裂あたりを思い浮べるとよいのではないかと思う。ひとつの細胞が分裂してふたつになったとき、このふたつのものは、いずれもそれ自身を中心に考えれば、自己がもともとあった親であり、分裂したもうひとつのものが自身のそとにと分離した子となる。さらにこれらが分裂して第三世代に属することになるとき、そのもともとの親を自称するものは、他の細胞を自分の孫とみなすことになる。だが、そとから見ると、この親と自称するものも、他の第三世代の細胞一般でしかない。ここでは、どの細胞ももともとの親を自称して、最初から存在していたということができるのである。「一者」は、同一の「一者」を、自分を自分から分離し二分化するのであり、つくりだされたどの一者もすべて同じものとして、分裂の最初のもの自体である

ことを主張でき、したがって、生成したのではなく、もともとから存在していたということになるわけである。

この数多の成立と維持のための、というより一者固有の活動として、ヘーゲルは、「排斥 Ausschliessen」「反発 Repulsion」(XXI,158)の作用をあげる。『大論理学』は、一者における「数多の一者」の項を「反発」とも名付け、この排斥・反発に二種あげている。ひとつは、今見た、一者自身の自己内反発であり、向一有の一に反発して、逆に見ると、この一が即自有的一者に反発して、それのそとへと分離していくものである。もうひとつは、分離した一者同士の外的な反発・排除の活動である。一者が自己を一者として維持するには、他の一者から干渉されたり、他の一者に牽引され飲込まれてしまって自身が消失するのをふせぐ必要があり、そのためには、他からの干渉・飲込みを排除し反発していかなくてはならないのである。

一者は、他の一者を排斥し、「没関係性 Beziehungslosigkeit」(XXI,157)となり、「無関係 Nicht-Beziehung」(XXI,158)化していこうとする。数多と いう全体は、各一者には、それ自身としては関係のないことである。一者は、自己にまとまった向自有として自己充足しており、その限り、そのそとの一者とは、本来的には無関係なのであって、他からの干渉が内面化してくることを排除していく。関係は、一者にとっては、端的に外的なことがらになる。

７．唯一者(unitas)から一者(unicitas)へ

多数の一者が出てくると、一者は、向自有として自己充足した唯一の絶対的な存在にとどまってはおれなくなる。もともとから、一者は、多くの一者としてあったのだが、それでも、他の一者と事実上無関係になっているのであれば、唯一者として自己を誇っておれる。他のものがあたかも存在しないかのように自己を唯一のもの絶対的なものと感じていることができる。だが、そとの他の一者がそこにあらわれると、この「唯我独尊」は、つぶれることになる。

シェリングの範疇論は、唯一神の「一」と、この世界の量的「一」を区別して、前者を unitas（唯一者）とし、後者を unicitas（一者）としているが(Vgl.Schellings Werke. hrsg.von M.Schroeter.Bd.I. S.107)、これをここでの唯一者と、数多のなかでの一者の区別に使うならば、自称 unitas は、他の自称 unitas の出現で、ともどもに現実的な数多のもとでの真実なすがたである、単なる unicitas につれもどされるということである。

一者が unitas でなく、unicitas となるのは、他の一者が並べられることによってである。このとき、一者は、自身を守るために、他からの干渉を排除して自己のひとまとまりの全体を維持しようと、排斥・反発の働きを前面にだすことになる。この排除・排斥の働きは、相互になされるのであり、どの一者も、排斥するものであるとともに、されるもの、限定されるものとなる。一者は、他の一者から排斥されることで、絶対的な unitas ではなく多くの一者のなかでの unicitas にと限定・有限化される。お山の大将たちが、ぶつかり

あうことで、唯一の絶対者であることを相互に停止するにいたるわけである。一者は、自身を相対化するのである。一者は、自己自身に向かった向自有として向一有のモメントをもっていた。この「向一」の「一」は、自己自身のことだったのだが、いまや、それは、自分のそとの他の「一者」になる。向一有は、自分にかかわってくるところの他の一者へと向かう側面となるのである。そのばあい、向一有において、相手を自分と同じ「一者」だととらえるのである。そとの他者もまた、自分と同じだ、一者だと見るのである。自分以下としないとともに、自分以上のものとするのでもない、自分と「同一」だととらえるのである。

唯我独尊は、つぶされるのであるが、多くの我・一者があって、これは、自分とまったく同一の存在であり、各々、それ自体としては、唯一であり、ひとであれば、かけがえのない実存・単独者であって、そういう一者として、相互　に尊重されるということになる。一者としては、おのおのは、自立したひとつのまとまりであり、相互に、他の一者のうちには入りこまず、他が関与してくることは排除しながら、向自有としての独立存在を維持しあっていくのである。

入学（入園）式の日の新入生たちは、まずは、各人、唯一者(unitas)として門をくぐって、王子さま、お姫さまとして式典に参加する。この唯一者たちは、相互に無関係であり、そとから、集められ並べられることになるわけだが、集められると、牽制しあいながら、自分と同等のものがいることを承認し、自他を一者(unicitas)にと強制していくことになる。やがては、優劣の差を見つけだし序列を自分たちのあいだに作っていくのだが、さしあたりは、無区別に自分と同一のもの・一者と見なして、相互に尊重しあい牽制しあうのである。

ここでは、多くの一者がならびたつのだが、それらは、相互に排除しあうだけであるから、それら自身のあいだでの相互関係は、存在しない。「無関係」(XXI,158)であろうとするのが各一者である。ばらばらにならべられているのみである。多くの一者のそのそとから、一者とはべつのものがみて、それらを「数多」としてひとまとまりに捉えるだけのことである。唯一者はもちろんだが、本来、一者も、比較を絶ったものである。自己に充足して、他とのかかわりを絶っていて、そとから見ると、のっぺらぼうである。なんら固有のもの、内的なものをそこに示していないのであるから、差異を見つけることなどできず、比較のしようがなく、ただ、同じだ、一者だといえるだけである。

８．一者の没個性化

一者は、それ自身においては、自己原因的で自立・独立したものとして、他との比較を断った唯一者(unitas)であり、独立独歩で自身の固有性をつらぬくユニークな個性的存在であろう。だが、それがいったんそとのものとのかかわりのなかにおかれると、外への（固有の）手がかりは存在せず、のっぺらぼうなので、たんに一者(unicitas)というだけの極端な没個性的存在に転じてしまう。唯一者(unitas)から一者(unicitas)への変化は、ユニ

ークで個性的なものの、完璧な没個性化であろう。

どこかの幼稚園の発表会で全員を白雪姫にして登場させたということを聞いたことがあるが、一者は、唯一者としては、個性あふれる主人公白雪姫である。しかし、それがそのまま、多くの同じ唯一者として立つとき、当人は、唯一者として白雪姫として存在しているつもりでも、自分のまえにいるのも、横にいるのも自分と同じようにきらびやかな白雪姫であれば、自身を他のまえで際立たすことなどできなくなり、みんな、自分と同じだ、同一だということになり、同じ演技をしなくてはと見習うようなことになってしまう。全員同一のものになりさがって１０人の同じ白雪姫になる。彼女等は、同じようにきらびやかに着飾った多数の無区別な（もし、差異が、個性が見い出されるようだったら、この全員白雪姫の演出は失敗したことになる)、均一の、したがって没個性的な少女にすぎなくなるのである。

たくさんある同じものの、どうでもいい一つが一者となるのである。「一 ein」であるとは、「同じ ein」ということであり、数多のもとでの一者は、どれも同じ一者であり、すべて無区別に「同一」と見なされるのである。一者は、向自有として向一有のモメントをもち、一者としての自身に向かったものであるが、この自分の向かうところの一者は、自分のそとに存在するべつの一者なのでもある。自分の存立を維持するために排斥するそとのものは、一者なのであり、そとの一者とうちの一者は、ともに同じ一者である。自分＝一者と、そとのものとを端的に無区別に一者として同一にとりあつかっているということである。尊い自分と同一のものとして、そとの一者を見なすということであるとともに、逆に、自己自身を、そとのつまらない無区別的な没個性的な空虚な一者でしかないと捉え反省するということである。

多くの一者のあいだには、「優位」の差はなく、それらは、まったき「無区別性」（XXI,162）のもとにある。かりに、ひとつの一者が個性的であるとし たら、それは別の一者とは「同一」ではないということになり、それは、同一の者、「一者」ではなくなってしまうのであるから、一者としては、完璧に個性もつぶしていなくてはならないのである。多くの一者のどの任意のものをとっても、一者としては、同一のものとしてあり、端的に没個性的でのっぺらぼうなのである。どの一者も、対外的には、完全な外面性のもとにあり、一切を捨象した空無の「点」(XI,338)として同一であり、対等である。めだか一匹も、くじら一頭も、一者としては、無区別に一なのであり、同一である。

ものを一・一者と捉えるとは、これをとらえるものがそとから均一化して同一と見ていくということであるが、ものそのものにおいて、そうなっているばあいもある。現実に均一化されたものも存在する。大量生産の商品は、だいたい（同）一であり、背くらべする森のどんぐりとか、砂浜の砂なども、そうであろう。社会的には、近代の民主主義は、各人を無区別・同一の「一者」と捉える。それは、各人を自立した自由な一者として対等・平等にあつかい、一者以上とも以下ともせず、この均一化した「数多の一者」をもって社会を構成するのである。

一者は、唯一者(unitas)としては量の世界には無縁の個性的な存在そのものであったが、それがそとの一者にかかわることが強制されるところでは、すべて同様の自己主張をなし唯一を主張しあって、唯一性は相殺されることになる。「排斥的一者」の排斥活動は、相互を単なる一者(unicitas)におしとどめあうことになる。各一者は、無区別同等の(つまり、異質性を捨象し、等質化した世界の)「同一 ein」のものとなって、「一 Eins」＝「単位 Einheit」となり、数多を可能とし、量的世界をつくりだしていくのである。

９．むすび

一者は、空虚化し没個性化する。これは、物についての事実としては、そのままに受け入れることで足りるであろうが、人間社会においては、空虚も没個性も多くのばあい各個人にとり否定的な事柄であって、そうならないように注意することが必要である。

一者は、向自有として、他のものを止揚して自己還帰した、自己充足的な独立存在である。この充実し自立した肯定的に評価されるはずの一者が、実は、空虚に転倒していくとヘーゲルは論じる。自分のみに充足してしまうと、そととのかかわりを失って空虚化し、自身において無規定的になって空虚なものになるのであった。また、向自有としての一者は、独立独歩であり、ユニークな個性的な存在である。しかし、実は、これも転倒していって没個性的になるのである。数多のもとにおかれる一者は、自己閉鎖した、のっぺらぼうの「点」的一者としては、まったく無区別で没個性的なものになる。

一者は、これをつつみ支える全体や普遍的なものを捨象して単なる個別のみになりきることで可能となるものであり、また、向自有として自己還帰していて、外と無関係になり自己充足するものであった。そして、このように一者化することは、自身に帰り自己を完成することであって、自己充実であり個性の発揮となるはずだが、一者化が行き過ぎると、実は、それが逆転してしまって、空虚化し没個性化していくのである。とすれば、そうなることが回避されるべき場面では、その逆転・転倒の生じる手前で一者化にブレーキをかける必要があるのである。

空虚となるのは、根本的には、一者にかかわる全体や普遍的なものが一者と無関係になり、疎遠になってしまうことによる。だとすれば、空虚となるのを回避するためには、独立した一者になろうというとき、全体と無縁・絶縁状態にならないようにしなくてはならないのであって、全体に流されるのをさけるためにこれから逃避して隠者等になろうというのは、行き過ぎになるのである。独立者・単独者として自身を確立しつつも、一者は、同時に、社会的全体・普遍のもとにしっかりと立つことが大切なのであろう。

近代市民社会は、自立した一者を基礎にした社会だが、この一者を孤立した空虚な存在にして放置することがある。孤立・疎外状態に陥らないようにするためには、社会に積極的に参加していく姿勢をもつことが一者に求められる。自立した一者として自主独立的でありつつ、全体の有機的な一つの部分となって、自分の固有の能力に見合った使命・役割を自覚し、これに生きていくことである。自立した批判的一者は、そのことにおいて、全

体の暴走をチェックできるし、全体は、一者に個性発揮と充実した生を与えることができる。

向自有としての一者は、自己に充足した独立自存の個性的存在である。だが、一者化が行き過ぎると、そとのものを拒否し、「井のなかの蛙」として唯一者を自称する、自己満足したのみの存在になってしまう。外へのかかわり・手がかりのない無内容な一者と化して空虚で没個性的なものにと転倒してしまう。とすれば、そのような否定的な極端に陥るのをさけるためには、向自有として自己還帰するというそのあり方に注意して、少なくとも、外への関係を断った「無窓」状態になることは回避しなくてはならないのである。

ヘーゲル弁証法でいう自己還帰は、自己を否定し疎外して、そのうえで還るものである。というより、外化し疎外した、その疎遠な、いわばその異境の地そのものを自分の新しい豊かな故郷として、この新しい故郷にと還っていくのである。充実・豊かさは、この自己否定的な疎外されたところに可能となるのである。その疎遠なところで新規のユニークな自己のあり方を形成し、豊かな自己に還ることになるのである。充実した還帰が、空虚化するのは、帰り切って自己に閉じこもり、外と無関係になることにおいてである。自己に還帰し独立の一者として自己を確保しつつも、絶えずそとに向かい、窓を、扉を大きく開いていくことが大切なのであろう。

Hegels Kategorie vom Eins --Das Leere und der Individualitaetverlust beim inhaltsreichen Einzelnen--

Yoshiki KONDOH

Das Eins ist nach Hegel das fuersichseiende Selbstaendige, das der Anderes(anderes Eins) ausschliessende und sich vereinheitlichende Punkt ist. Er zeigt es als die ausschliessende Einheit. Dies selbstaendige Eins hat als Fuersichsein An-sich-sein(oder Fuer-sich-sein) und Fuer-eins-sein in seinen Momenten. Als fuer sich oder an sich, steht Eins ihm gegenueber. Und als fuer eins, kann das reelle Eins und sein ideelles Eins, nur ideell geteilt werden und ist wirklich ein und dasselbe.

Das Eins hat wie das Atom das Leere nach dem Inneren und Aeusseren. Als Abstraktes, das von dem Ganze oder der konkreten Wirklichkeit ge trennt wird, ist es eigentlich leer. Auch hat es als Selbstaendiges nicht die Beziehung oder Bestimmung (der anderen Aussenwelt). Also wird es unbestimmt und leer.

Das Eins ist das abstrakte Einzelne, das die vielen Einzelnen unter seiner Allgemeinheit hat. So ist es neben den anderen Eins. Die Eins machen die Vielheit aus und gehen notwendig zur Quantitaet ueber. Indem das Eins ganz identisch mit anderen Eins ist, muss es die Individualitaet aufheben. Bei solchem Eins ist der

Verlust an der Individualitaet unvermeidlich.

Um diesen Verlust oder das Leere zu vermeiden, muss das Eins die Beziehung zum Allgemeinen oder Ganze immer haben und das Fenster zur Aussenwelt aufmachen.

平成 9 年　6 月　　『倫理学研究』(広島大学倫理学研究会) 第 10 号 15~34 頁